

SGH インドネシア・バリ研修旅行を実施しました

3月2日（土）～9日（土）の7泊8日の日程で、SGH インドネシア・バリ研修を実施し、GLコース2年生37名が参加しました。このGL研修旅行は、世界の時事問題への理解と平和貢献への意識やグローバルリーダーシップ、異文化や異環境下でのコミュニケーション能力などの育成、そして研修体験や学習したことについて研究発表や課題解決プレゼンテーションを行い、課題意識を高めることを目的としています。特に、インドネシア・バリ研修では、バリ島の社会課題を深く掘り下げ、現地のニーズに沿った解決策を創造する経験を得るための課題解決ワーク、マクロ指標では見えてこない現地の状況を知り、社会問題を正しく捉えるための視点を獲得するための生活者視点の観察、そして社会問題解決に正面から取り組み、地域や人々に貢献するための方策を学ぶため、現地課題に取り組む起業家や組織との協働を具体的狙いとして位置付けています。

研修実施前から計12回の事前学習会と、英語授業でのリサーチとプレゼンテーション準備や練習など、特にバリ島の貧困や海洋プラスチック汚染、プラスチックごみの問題について調査し考えをまとめました。また、2回にわたるプログラムコーディネーターのタクトピア様による事前研修で、解決する課題を持つ人物像を持ち、その課題に対する解決策の原型を作り、研修に臨みました。

1日目 飛行機から初めてバリ島の地形を見た時、歓声が上がりました。地震・火山大国であると知識や情報として知っていましたが、実際に空からアグン山を臨み、その様子を自分の目で確かめることができました。蒸し暑い気候、飛び交うインドネシア語、熱帯雨林の広がる緑あふれる街並み、街中に点在するバリ・ヒンドゥー教寺院、いつもと少し違うトイレの使い方…。その一つひとつの日本との違いを自分の目で見、肌で感じながら、その違いを楽しみ、生徒たちの心は高揚していました。到着後、バリ島での過ごし方についての諸注意を聞いて、翌日を迎えました。

2日目 この日から本格的な社会課題解決ワークの研修が始まりました。まずは、オリエンテーションの中で「バリで活動している起業家や団体の活動内容と想いを理解すること」、「五感を使ってバリを全身で感じること」「バリ研修での個人目標を全体に共有すること」が大切であることを確認しました。この研修の個人目標として生徒たちは、「バリでしか見聞できないことをしっかり自分の目と耳で受け止めたい」「バリについて誰よりも詳しくなりたい」「バリの



課題に対して解決策をじっくり考えたい」「どうすることでバリの人が幸せになるかをしっかり考えたい」とみんなの前で語っていました。その後、アジア太平洋の途上国ですでに社会変革を起こしている現地社会起業家の支援等を行っている **Earth Company** の田丸悟郎氏より、世界には様々な社会課題があり、その状況を少しでも改善・支援しようと活躍している起業家が大勢いるということ、さらにバリ島はソーシャルイノベーションの宝庫であるということをお聞きしました。また、バリ島には3つの経済層 (**Tourism, Long-term stay, Local**) があること、固有の社会課題があることを知りました。日本とインドネシアのGDPを比較し、GDPと比例して果たして日本人はインドネシア人よりも幸せと言えるのだろうか？経済的豊かさと比例して幸せと言えるだろうか？経済的に貧しいとはどういう状態か？なぜそうなるのか？と考えるきっかけとなりました。ネイティブアメリカンの格言に、“**We do not inherit the earth from our ancestors, we borrow it from our children.**”とあります。この考え方に触れた生徒たちは、なぜ今これらの社会課題に向き合い、取り組んでいく必要があるのか考えさせられたようでした。

その後、バリ島郊外の村のエンパワメントを行う社会起業 **Five Pillar Foundation** 創業者の **Wira** 氏から観光エリア以外の地方の過疎化など、バリ島の抱えている問題や、なぜ **Five Pillar Foundation** を設立したのか、具体的に誰にどのような支援を行っているかについて講演をして頂きました。支援にあたっては、**Education, Economy, Community, Culture, Environment** といった観点を複合的に取り入れ、グローバルに、そしてローカルに取り組む必要があるとお聞きしました。バリ島には、観光地としての表側と裏側があり、観光の裏側にはゴミ、環境破壊、交通、犯罪等の問題があり、それらを解決しつつ持続可能な観光業が必要であると学びました。



講演の後には、**Five Pillar Foundation** が支援する **Penarungan Village** という村を訪問しました。この村では、バリ島の伝統文化に着目した観光業を発展させることで、過疎化や経済的困難を解決しようとしています。村では、バリ・ヒンドゥー教の伝統家屋の造り、伝統や風習、宗教行事の大切さ、バリ島の挨拶の仕方、工芸やコーヒー、ココナッツオイルなどの特産品の伝統的手法、バリの伝統音楽や舞踊であるバロンダンス、水牛を使った稲作など、村の取り組みを観光客の立場から体験しながら、同時にバリに住む人々の背景にある文化を五感を使って理解しました。その後、事前学習としてバリの貧困層の人々が抱えている課題を解決するためにどのような解決策が必要かを各チームで予め考えてきたアイデアを、**Wira** 氏に対して1分間ピッチをしました。このピッチでは、ペルソナ（問題を抱えている支援したいと自分が思った対象の人）がどのように困っているのか、そしてどのようなアイデアでそれを解決しハ



ッピーな状態にしたいかを 1 分間で相手にわかりやすく伝えるというものです。Wira 氏からはフィードバックとこれからのアイディアの練り直しに対して激励の言葉をいただきました。振り返りの時間では、一日の出来事を振り返り、講演会の内容や移動・アクティビティー中に見聞きした出来事をポストイットに書き出し、その日学んだことを整理しました。さらに、その中で特に印象に

残ったことや心が動かされたことは何か、またそれはなぜかを書き出し、お互いに共有するリフレクションの時間を持ちました。その中で、今自分たちは難しい問題にチャレンジしている、紆余曲折があり葛藤があり試行錯誤しながら、難しい社会課題を解決するためのアイディアを出していく経験をしているのだということを感じたようでした。

3 日目 この日は、生徒たち一人ひとりの心に大きな衝撃が走る日となりました。午前中は、Bye Bye Plastic Bag (BBPB)との交流会を行いました。BBPB は、プラスチックごみをなくす「レジ袋ゼロ運動」を掲げ、2018 年 TIME 誌が選んだ最も影響を与えた 10 代の一人として世界でも注目されている Wijsen 姉妹が立ち上げた活動団体です。今や世界中で活動している彼女らとの交流が叶ったことは千載一遇の機会でした。Melati Wijsen さんから、このバリの海を、地球を、プラスチックごみから救いたいとの思い、BBPB を立ち上げるに至った熱い思い、環境にやさしいエコバッグの製作やリサイクルの工夫などをお聞きしました。同時に、ある物事を“Pure passion”（熱い思い）を持って推し進めていくことの大切さ、“Think out of the box.” “Be a change maker.” “Be honest

to yourself.”などのメッセージを Melati Wijsen さんからお聞きし、生徒たちの心に深く突き刺さっていました。また、BBPB Kyoto として活動が始まりつつあるとの事をお聞きし、生徒たちは「ぜひ一緒にレジ袋ゼロ運動に協力したい」「自分たちにできることを今すぐにもやりたい」と気持ちを大きく前進させていました。まさに、Wijsen 姉妹が TED talk の中でも語っていたように「リーダーになるのに、年齢は関係ない」ということを感じた瞬間でもありました。その後、本校生より、日本のゴミ問題やゴミ処理方法などの現状、本校のゴミに対する意識調査やその現状、そして解決策として政府や自治体、企業が行っていること、また高校生にできることをパワーポイントでプレゼンテーションしました。



さらに、レジ袋を使用しない代わりにエコバッグとして日本の伝統である風呂敷を用いるアイデアを実演しました。Melati さんや BBPB のメンバーには、日本の現状や本校生が考えていること、風呂敷のアイデアを聞いて、興味を持って頂けたようでした。交流会の最後には、グループに分かれお互いに質問し合うなど、意見交換をすることができました。

午後は、3つのグループに分かれてエリア別に社会課題現地訪問をし、問題やそのリアリティーを目の当たりにし、立ち竦む生徒もいました。訪問地のうちの一つは、バリ島最大のゴミ集積所の近接エリアにある **Suwung Community** でした。このゴミ山は、東京ドーム約7個分の大きさにも上り、その悪臭対策や運動施設の建設のためゴミ山の埋め立てが進められているものの、そのゴミ山を目の前にした瞬間、言葉を失いました。Bali Life Foundation という団体が、このコミュニティ内に学校を作り、そのスラムのコミュニティに住む子どもや母親を支援しています。この学校で子どもたちが何を学び、何を望み、どのように暮らしているのかを観察し、インタビューを行いました。またそのコミュニティに住む人々の家庭を訪問し、



ゴミ山からゴミを拾って生活するウェイスト・ピッカーたちのリアルな生活を観察しました。貧困のために十分な教育を受けられない、仕事に就くためのスキルや資格がない、ゴミ山から拾ってきたゴミを売る生活は子どもの多い大家族が1日十分食することができる食糧を確保できない、不衛生な環境のために感染症などの病気に罹る…。この貧困の連鎖の現実を生徒たちは直視しました。また、支援先の学校では、子どもたちに日本の文化である遊びを教えて交流しました。けん玉、竹とんぼ、折り紙、あやとり、福笑い。交流を通して、貧困の中でも家族と共に暮らす子どもたちの笑顔と生きるエネルギーを感じました。貧困とは一体何か？幸せとは何か？ゴミを減らすにはどうしたらいいのか？生徒は一人ひとり、この難しい問いに立ち竦みながらも、この貧困の負の連鎖を断ち切るために何ができるのか、思いを巡らせていました。



Suwung Community を訪れたグループは、バリ島一般世帯家庭の訪問もしました。ウブドに住む中流家庭を訪問し、その暮らしぶりを観察しました。中流と言っても3万円程度の世帯月収の大家族です。生徒たちは、現地の人々の生活についてもっと知りたいという素直な気持ちからか、どんどん質問が沸き上がり、彼らがどのような希望や不安があるかをインタビューすることができました。バリ島の

人々がいかに信心深く、祖先や神、宗教行事を大切にする文化であるかということも知ることができました。また別のグループは、バリ島の孤児を引き受ける **Children's Home** を訪問しました。孤児たちは学校に通いながら、この孤児院で生活しています。そしてこの孤児院は寄付で成り立っています。生徒たちは、孤児たちと日本の伝統的な遊びを教えてあげ、共にバレーボールやダンスをして交流しました。交流をしながら、子どもたちがどのように生活しているのか、彼らにとって必要な教育は何か、孤児院を運営する上での困難や挑戦について学びました。また、生徒たちは心から「**donation** したい」と語り、日本から持ってきた支援物資を渡したりしました。同時に、**poverty tourism** についても学ぶ契機となり、自分たちが行っている支援は本当にその人々にとって良いことなのか？自己満足になっていないか？自分たちの支援の仕方は間違っていないのか？と考えることにもなりました。



4 日目 この日は、ブミセハット助産院を訪問し、貧困が引き起こす問題を様々な切り口から捉える日となりました。同助産院は、貧困や災害などが原因で医療を受けられない妊産婦や患者に対して、無料で医療を提供しているクリニックです。また、産科医療を超えて、一般診療や山間部への往診、食糧支援や助産師・看護師研修、被災地支援まで、必要とされることは何でもする、コミュニティの駆け込み寺にもなっています。ヨガや **AIDS** 教育、識字教育、**IT** 教育、出産後のケアも行い、中絶率を減らす活動なども行っています。助産院内の施設やサービスについて見学した後、**Earth Company** の濱川明日香氏よりご講演いただきました。また、同助産院の創始者ロビン・リム氏にお会いすることもでき、ロビン氏は生徒一人ひとりにハグをしてくださいました。人を愛する気持ちの大切さやマザーテレサのようなロビン氏の愛の深さを感じました。講演会では、助産院を設立したロビン氏の思い、そして世界で何が起こっていて、落とさなくてもよい命がいかにあるのかについて知りました。1日につき830 人もの妊婦が合併症で命を失います。そのうちの 99%は発展途上国で起こっており、そのうち 90%は助かる命です。十分な医療知識がなかったり、貧困のために医療費を払えず命を落としたり子どもを奪われたりしています。災害のために十分な医療が行き届かない場合もあります。文化や宗教感の違いにより医療から遠ざかったり、食生活の変化により新たな課題が生まれたりしています。助産院設立に至った過程や愛や命の大切さについての壮絶な語り、“**You can be a change maker**”、誰の手でもなく自分の手で変えることができるのだという



ロビン氏のメッセージは、心に深く突き刺さり、多くの生徒が涙を流していました。

講演会后、同助産院支援の母親の家庭を訪問しました。そこでは、生活空間を観察し、支援を受けている母親の環境について気になった点についてインタビューを行いました。実際に生活空間を訪れることで、より鮮明に環境や状況について理解することができました。

その日の振り返りの時間では、心の中の思いやもやもや、心の中に湧き上がっているものを思いつくままに書き出してみました。そして、全員が輪になって座り、思い思いに語り合いました。「ゴミ山の酷さが衝撃だった。ゴミ山がなくなればいいというのは簡単だけど、本当にそれでいいのか」「お金がないから不幸だと先入観を持っていたのがダメだった」「問題の表面しか見ていなかった」「問題に向かうとき、相手の立場を考えないといけないと思った」「他人事だった。何もわかってなかった。上から目線でみていた」「何かしてあげたいという気持ちが湧き出てきた。でも支援といってもその距離感が難しい」「帰国して日常に戻って感じたことを忘れてしまうのは怖い。忘れたくない」「愛の凄さ、大きなもの、親からの愛を当たり前で過ごしていた」「社会活動家はなぜ活動できるのか？自分がやりたいと思って活動している、義務感ではなく自分がやりたいと思うことをやるべき」「毎日学校に行けていること、毎日の暮らしに感謝を持つことから始めたい。当たり前だけど当たり前でできていないことがある」「本気で世界を変えるためにやっている人の前で自分は中途半端なことをしてしまっていた」「人に何かを伝えるときにはその強い思いが大事。強い思いが相手を変えと思った」「普段から英語や普段の生活もしっかり頑張りたい」「他人と比べて劣等感を感じるが、自分と向き合って頑張りたい」「仲間の力を借りて頑張りたい」「考え方が変わった」「バリにこのメンバーに来られて良かった」。生徒たちから溢れ出た数々の言葉は、バリ島の貧困の現実やそれに向き合い、愛と **passion** を持って世界を変革しようとしている **change maker** たちのメッセージに、心が大きく揺さぶられた瞬間があった証拠であり、そして各々が一所懸命に自分自身と対峙している証拠です。この瞬間から、生徒たちは明らかに課題に向き合う姿勢が変わり、全員がその後のアイディアの練り直しを真剣に考えていました。



5 日目 この日は、グリーンスクールを見学しました。グリーンスクールは、人類の様々な問題を解決し、未来を大きく変えていける次世代リーダーを輩出するという強い意志をもって設立され、**Sustainability** を目指した学校です。BBPB の Melati Wijzen さんもグリーンスクールの卒業生です。世界遺産級の竹建築の校舎は「世界で一番見たい学校」と称され、国連との共同事業や中学生 **NPO** 起業家の輩出などで、世界的に注目を集めています。プロジェクト学習中心のカリキュラムで、特に生徒たちは、非常に



多くの種類別に分類されたごみ分別の仕方、雨水からの製水器、地産地消・自給自足の目指した農作、アクアポニクス、廃材や廃油を再利用した施設や商品、水力発電やソーラーパネルを利用した太陽光発電装置などに見入っていました。また、自分たちの学校のキャンパスや日常生活においても、もっとエコで環境にやさしい、持続可能な方法があるのではないかと模索し始めていました。



午後は、メンターとして **Earth Company** の創設者である濱川知宏氏を迎え、練り直した課題解決案を中間発表しました。問題を抱えている人々のどのような困り事を、どうやって解決し、どのような幸せな状態にするかについて、わかりやすく発表するようにしました。ゴミ啓発バス、母子手帳アプリ、虫よけブレスレット、孤児の絵画を利用した商品パッケージの販売等、各チームから独自のアイディアが発表されました。濱川氏から、実現可能性、環境資源への配慮、継続性、社会的影響、効果の検証方法、プレゼンテーションの導入方法に至るまで様々なフィードバックやアドバイスを頂き、再度各チームでアイディアを再考することになりました。

この日はバリ島の正月にあたるニュピの前日であり、夕食後にオゴオゴと呼ばれる怪物や悪霊の大型人形を神輿のようについで悪霊を払うお祭りの見学に行きました。2〜3カ月前から地域ごとの若者が集まって怪物人形をつくりあげ、悪霊払いの儀式パレードをします。幸運にも、年に一度のお祭りとその街や人々の様子を観察することができ、貴重な体験をすることができました。

6日目 この日は、バリ島の静寂の日であるニュピの日でした。バリ・ヒンドゥー教の暦では正月にあたり、この日はバリ全土で外出、労働、灯火の使用、殺生などが一切禁じられ、バリ・ヒンドゥー教徒にとっては非常に大切に、一日静かに瞑想し世の中の平和を神に祈る日です。旅行者もホテルから外出することは禁じら

れており、生徒たちは静寂の日を体感するとともに、これまでの研修の振り返りや、自分はどうか？どうあると幸せなのか？について自分自身を見つめる内省の時間を持ちました。自分の内側にある深いところを言葉にしたり、自分でも気づいていない深いところに潜る作業です。また、相手の声に耳を傾けることで、自分の声にも気づき、自分がどうか？何が大切かに気づくことができました。

また、ニュピの日に相応しく、自分自身の将来やキャリアについても考える時間となりました。宿泊ホテルの日本人スタッフであり、バリ舞踊家中谷薫氏よりバリ舞踊との出会いやその文化に流れる考え方や精神についてお話を頂きました。また、数々の講演





会や日本語指導を通し、バリ舞踊や日本語に触れたことによって貧困などの困難に曝され打ちのめされた目つきをしていた子どもの目がキラキラと輝き変容した中谷氏のご体験に、高校生の生徒たちは驚くばかりでした。日本とバリの架け橋となって、バリ舞踊で学んだことを多くの人々とシェアしたいという同氏の思いは、生徒たちにとっての国際交流、国際理解のあり方を考える契機となりました。午後はホテルにてバリ文化体験として、亀の木彫り体験やお供え物づくり、バリ舞踊体験を行いました。多くの時間は最終プレゼンテーションに向けてのラストスパートとなりました。どのチームも全員が納得するまで議論を重ね、英語プレゼンテーションを作成し、発表練習も本番直前までお互いに聞き合い、アドバイスし合いながら最後の最後まで粘り強く取り組んでいる姿が見られました。

7 日目そして迎えた研修最終日。ブミセハット助産院を会場とし、Earth Company の濱川知宏氏、濱川明日香氏、Five Pillar Foundation の Wira 氏の 3 人の社会起業家の前で、自分たちがこれまで練りに練ってきたアイデアを英語でプレゼンし、質疑応答が行われました。社会課題解決のための最終プレゼンテーションは、実際にバリに来て問題を直視し、心を大きく揺さぶられ、何とかして援助したいと思った人を強くイメージし、その問題を解決するためのアイデアをチームのメンバー全員の知恵を出し合って発表したものでした。発表は、①Passion:心からやりたいと思っているか、気持ちがこもっているか、②Innovation& Feasibility:アイデアは革新的かつ実現性があるか、③Impact:社会にどんな変化があるか、といった観点より、社会起業家たちが支援したくなるようなアイデア、チームが選ばれます。実際に現実の課題に直面し活動している大いなる社会起業家たちを目の前にしたプレゼンテーションは、緊張が張り詰めたものであり、生半可な発表では失礼だという雰囲気でした。しかしながら、どのチームもその言葉に魂と passion のこもった発表となり、社会起業家たちの心を動かし、感心させる程の成果を挙げました。最終プレゼンテーションを終えた生徒たちの表情は、達成感、充実感で満たされ、最高の笑顔が満ち溢れていました。



その後、この研修を通して最初に設定した目標と現地研修の日々の振り返り内容も見返しながら、研修の中で出来た挑戦、上手いかず悔しい思いをした経験、そしてそこから何を得られたか、自分自身がどう成長したかを振り返りました。そして、大きく心が揺り動かされた思いや、自分も愛と passion を持つ



て、人のため、地球のために何かやりたいという気持ちが高揚して来、今後頑張りたいことについて声に出して決意表明をしました。その後全員で訪れたタナロット寺院の景色や、海や風の音、爽やかに晴れ渡った太陽のすべてが生徒たちの頑張りを讃え、未来に向かう勇気を与えてくれているかのようでした。生徒たちの充実感に満ちたやり切った清々しい笑顔を見て、近い将来、きっと **change maker** として一步を歩み出してくれると確信しました。

インドネシア・バリ研修を通して、生徒達は大きく変容しました。日に日に生徒達の表情、目つき、行動に変化が見られました。普段自分の意見を言わない生徒が真っ先に無意識のうちに挙手し心から湧き上がる疑問を質問する姿。社会課題の現実の惨さ、難しさ、そして複雑さを知り、涙する姿。貧困とは何か、幸福とは何かという答えのない問いに戸惑う姿。クラスメート全員の前で自分の思いや弱さを心から語り涙する姿。チームでの意見の対立から逃げずに、仲間を信じ、徹底的に話し合う姿。毎晩遅くまで何度も何度も議論を重ね、アイデアを練り直し、粘り強くプレゼンテーションを準備する姿。課題解決最終プレゼンテーションで自分たちの心の底から湧き出る **passion** を込めて発表する姿。そして、社会課題に真っ向から取り組む **change maker** や、今日大事な人を失わないために愛のために生きる人々から、地球や未来のために一步を踏み出す勇気やエネルギーをもらい、自分たちにも何かできるはずと奮い立ちキラキラと目を輝かせた生徒たち。これらは、社会課題の現実を直視し、またその社会課題を解決しようと熱い思いで取り組んでいる **change maker** たちのメッセージを全身で受け止め、そして大きく心が動いた証拠に他なりません。そして、心の深いところまで掘り下げ、自分自身を内省し見つめられた結果でもあります。「こんなに濃い研修は経験したことがない」「数年に一度に経験するぐらい心が大きく揺さぶられる経験を毎日経験していたようだ」「間違いなく一生忘れることができないう出会いと経験ばかりで人生のターニングポイントになった」「180度考え方が変わった」「自分とは何か、自分が本当にやりたいことは何かを考えるようになった」と生徒は語っていました。Global issues を学ぶということは、人として大切なことは何かを学ぶということ。この研修を終え、難しい問いの答えを探しながら、生徒達は未来を見つめ、すでに一步ずつ着実に歩んでいるのです。

